(39頁よりつづく)
録装置が付属している．

以上のほかに水路部班は，観測地の天文的経度・緯度の測量と，人工衛星を観測しての測地的経度・緯度の測量をもあわせおこなう計画であるという．

6. 出　　発

3機関の観測班は合同して，「メキシコ日食日本観測団」を結成して，同一行動をとる予定である．渉外関係では，外務省とメキシコ駐在日本大使館の正式外交ルート，アメリカ N.S.F. の情報統合ルート，メキシコ国内日食委員会による入国受入れルート，メキシコ政府観光審議会による施設関係の情報ルートなどを通じて，緊密な連絡がとられている．

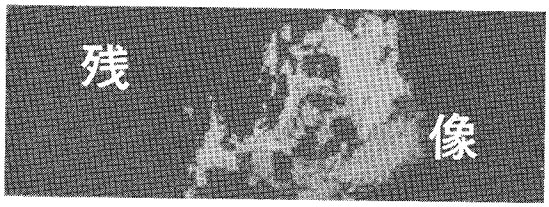
観測機材は，日食荷物運送には手馴れた丸運 K.K. により127梱包にまとめられ（東京天文台53個，花山天文台38個，水路部36個），川崎汽船ベネズエラ丸に積みこまれてすでに1月8日横浜を出港した．海上20日でアカプルコ港に到着する．人員の方は団長・副団長の2名が1月27日に空路メキシコ市にとび，そこでの官庁連絡，アカプルコでの荷物受取り，現地での視察と土地借用交渉などをなし，2月3日東京発の後続の団員7名を迎えて，いよいよ観測陣地の設営にとりかかることとなる．それ以後のことはまたの機会にしるす．帰国は3月下旬になるであろう．　(1970・1・11 記)

藪内清氏朝日文化賞受賞

この度，朝日新聞社による昭和45年度の朝日文化賞が藪内清氏におくられた．今回の受賞は同氏が多年にわたって京大人文科学研究所で続けられた中国の暦法史に対しておこなわれたものであり，その主著「中国の天文暦法」については本誌1969年9月号に広瀬秀雄による適切なる紹介があり，さらに藪内氏のここに到る業績については，本誌同年5月号に同じく広瀬氏の「日本天文学史研究について—藪内清氏に捧ぐ—」の一文にくわしくのべられてあってここにあらためてのべることもないと思われるので，ただ会員諸氏とともにおよろこびを申しあげる次第である．　(内田正男)

観測中の地震（岡山）

岡山は地震の少ない所である．1969年12月20日午後9時16分，188センチ望遠鏡のクーデ室内で観測していたK氏，オペレーターのW氏は，突然下からつきあげるはげしい衝撃を感じた．K氏はとっさにファインダーのヨタロウ鏡を倒したが，トレール中の星は視野からとびさってみえない．



振動は1回のつきあげだけで，その後の横ゆれはなかったが，分光器の各部分ははげしい音をたててゆれた．何かの爆発ではないかとドームのベランダに出て見渡したが，半月がこうこうと霜の夜を照らしているばかりであった．

しばらくして星はファインダーの視野の中にもどってきたが，おどろいたことに星像は細長く矩形にのびている．あるいは主鏡にひびが入ったのではないか……と，観測を中止してドームの電灯をつけたが，数分後に星像は丸くなったが，スリットの位置まではもどらなかった．

開所以来，S氏・N氏がそれぞれ1回観測中に地震に出会っている．しかしその時は振動が止った時，星はスリット上のもとの位置にぴたりともどったという．

ラジオの発表では，岡山・高松・松永で震度1，震源地は岡山県西部，深さは不明とあったが，ちょうど観測所の真下に大なまずがいたことになる．

なお，91センチ望遠鏡で分光観測中のH氏は，衝撃と同時に，巨人アトラスのごとく望遠鏡のセンターピースを両手で支えていたという．これは美談として記録されている．

(石田五郎)

1969年12月の太陽黒点（g, f）（東京天文台）

1	11,	45	6	8,	41	11	2,	8	16	9,	59	21	10,	106	26	—,	—
2	10,	42	7	7,	22	12	4,	9	17	8,	66	22	14,	81	27	—,	—
3	8,	43	8	4,	11	13	6,	21	18	10,	99	23	10,	86	28	11,	76
4	10,	59	9	4,	18	14	8,	33	19	11,	66	24	11,	62	29	12,	60
5	11,	58	10	4,	19	15	10.	48	20	9,	82	25	11,	80	30	12,	101
															31	—	—

（相対数月平均値：101.6）

昭和45年1月20日
印刷発行
定価 125 円

編集兼発行人　東京都三鷹市東京天文台内　森本雅樹
印刷所　東京都文京区水道2-7-5　啓文堂松本印刷
発行所　東京都三鷹市東京天文台内　社団法人 日本天文学会
電話武蔵野 45局 (0422-45) 1959　振替口座東京 13595